

## 2015 年度 入学 試験 問題

# 世界史 B

(試験時間 10:30~11:30 60分)

1. この問題は、入学願書提出時に選択した科目の問題です。科目名を確認のうえ、解答してください。
2. 解答用紙は、記述解答用紙のみです。
3. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
4. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。
5. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。

I 以下の文章中の空欄AからEに最も適切な語句を記入し、続く設問に答えなさい。  
ただし、同じ記号には同じ語句が入る。(50点)

イェルサレムには、前4000年紀から人が住んでいた痕跡がみられるという。また、前20世紀のものとされるエジプトの文書にイェルサレムの名前が出ており、その名は比較的はやくから異民族にも知られていたようである。さらに後の時代のエジプトの文書の中には、当時エジプトの勢力圏にあったイェルサレムの支配者がエジプト王<sup>①</sup>  
のアメンホテプ4世に送った書簡が含まれている。

旧約聖書の記述によれば、初代サウルの後に王となったダヴィデ<sup>②</sup>のもとで、イェルサレムはヘブライ王国の首都に定められた。前1000年頃のことである。ダヴィデの後のソロモン王の時代には、イェルサレムにヤハウエの神殿が建設された。しかしこの王の死後、ヘブライ王国は、イスラエル王国とユダ王国に分裂してしまう。

イスラエル王国はヘブライ王国の分裂後、その北部に建てられたが、約200年後にアッシリアに征服された。他方、旧ヘブライ王国の南部に建てられたユダ王国はイェルサレムを首都としたが、前586年に新バビロニア(カルデア)によって滅ぼされた。この時、ユダ王国の住民の多くは、新バビロニアの首都であるバビロンに強制移住させられた。この事件をバビロン捕囚<sup>③</sup>と呼ぶ。その後、新バビロニアがアケメネス朝のキュロス2世によって征服されると、イェルサレムもアケメネス朝の支配下に組み入れられることになる。しかし、バビロン捕囚によってバビロンに強制移住させられていたユダヤ人たちは、キュロス2世によって解放された。バビロンから帰国した者たちは、イェルサレムに神殿を再建し、ユダヤ教<sup>④</sup>を成立させた。

このアケメネス朝も、前4世紀の後半にアレクサンドロスによって滅ぼされた。彼の死後、ギリシア・エジプトからインド西部に及ぶ大帝国が有力部将たちによって分割されると、イェルサレムはプトレマイオス朝エジプトとセレウコス朝シリアの影響を強く受けるようになる。

前2世紀になると、セレウコス朝のアンティオコス4世が前170年にイェルサレムを占領し、ユダヤ人の虐殺・略奪を行った。これに対してユダヤ人側はセレウコス朝に対して激しく抵抗した結果、前164年にイェルサレムの奪還に成功している。その後、セレウコス朝の領土内においてかなりの自治権をもったユダヤ人王朝(ハスモン

朝)が成立したが、前63年にポンペイウス指揮下のローマ軍がイエルサレムを占領した。<sup>⑤</sup>ローマは現地のユダヤ人を王としてイエルサレムを統治する方法を採用した。中でも有名なのはヘロデ王であろう。彼は、将来の王となる赤子(イエス)の誕生を東方の学者から聞くと、その赤子の誕生地がダヴィデ王の故郷のベツレヘムであることを突き止め、ベツレヘムの2歳以下の男児全員の殺害を命じたことが新約聖書に述べられている(イエスとその家族はエジプトに避難して難を逃れたという)。

ヘロデ王の死後しばらくして、イエルサレムはローマの直轄領となった。後にイエスがローマ総督ピラトから死刑宣告を受けて十字架にかけられるのも、こうした事情を反映している。しかし、66年にユダヤ人たちはローマに対して大規模な反乱を起こした。これについては、フラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ戦記』の中に記されている。結局、70年にイエルサレムが陥落し、城壁や神殿は破壊されたままに放置され、同地へのユダヤ人の居住も禁じられることになった。

4世紀になると、コンスタンティヌス大帝がキリスト教を公認する。彼の母であったヘレナは熱心なキリスト教徒であり、イエルサレムに滞在して教会を建設した。その後、異教復興を目指しキリスト教会から「背教者」と呼ばれた(A)帝の時代にユダヤ人はイエルサレムにおける神殿の再建を願い出て許可されたが、ササン朝との戦争で(A)帝が戦死してローマ帝国がキリスト教に回帰すると、神殿再建計画は禁止された。イエルサレムは614年にササン朝に占領され、その後ビザンツ帝国によって奪還されたが、結局は630年代後半にウマルに率いられたアラブ帝国によって征服された。<sup>⑥</sup>

メッカを本拠としていたアリーに対抗するためもあり、ウマイヤ朝はイエルサレムを宗教的に重視し、この地にモスクを建設した。ウマイヤ朝を倒して建てられたアッバース朝は首都をバグダードに置いたため、地理的に首都から離れていたイエルサレムは再び衰退のみちを辿ることになる。その後、イエルサレムは、969年にカイロを首都とするシーア派の(B)朝によって支配されることになった。

11世紀に入ると、イエルサレムは十字軍との関連でキリスト教世界の大きな注目を集めることになる。すでに10世紀からキリスト教徒によるイエルサレムへの巡礼熱が高まっていたが、イスラーム系のセルジューク朝がイエルサレムを支配下に置くと、教皇ウルバヌス2世は聖地回復を掲げて1096年に十字軍が組織された。この第<sup>⑦</sup>

1回十字軍は1099年にイェルサレムを占領し、イェルサレム王国を建てた。その後、キリスト教勢力とイスラーム勢力との間で聖地をめぐる攻防が繰り返されることになる。しかし、1187年にはイェルサレムが陥落し、1291年にマムルーク朝の攻撃によってイェルサレム王国の最後の拠点アッコンも陥落してしまう。その結果、十字軍勢力はこの地域から完全に駆逐され、イェルサレムはマムルーク朝の支配下に入った。

16世紀前半になると、オスマン帝国のセリム1世がイェルサレムを占領した。以後、イェルサレムはオスマン帝国に支配されることになる。セリム1世は、メッカ・メディナの支配権も獲得した。オスマン帝国はイスラームの王朝であったが、帝国内に住むキリスト教徒やユダヤ教徒の共同体には法に定められた自治が認められ、イスラーム教徒との共存が可能であった。セリム1世の後を継いだスレイマン1世は、<sup>⑧</sup>イェルサレムの復興に力を尽くし、彼の治世の間にイェルサレムを囲む城壁も再建された。

スレイマン1世の死後、オスマン帝国は時間をかけてゆるやかにその勢力を弱めていく。それに伴い、イェルサレムも人口が減り始め、街道の治安も悪化していった。1799年にはナポレオンがエジプトを占領した後、パレスチナを通過してフランスに帰還したが、彼はその際にイェルサレムにはほとんど関心を示さなかった。エジプトはその後、イギリスとオスマン帝国の連合軍の攻撃によって奪い返され、オスマン帝国の主権が回復した。だが、この混乱に乗じて、民衆の支持を得たムハンマド=アリーがエジプト総督になり、やがてオスマン帝国もその地位を認めた。ムハンマド=アリーは強力なリーダーシップを発揮してエジプトの近代化をおし進めるとともに、シリア・パレスチナにも侵攻を開始する。その結果、ムハンマド=アリーは、1830年代には一時的にイェルサレムをその版図に組み込むことに成功し、街道・道路の安全の確保や税の適正化に努めた。これは、イェルサレムの近代化を告げるものでもあった。結局、ムハンマド=アリーは2度にわたるエジプト=トルコ戦争を戦ったものの、エジプト・スーダンの総督の地位の世襲が認められたにとどまり、シリア・パレスチナの領有権を得ることはなかった。<sup>⑨</sup>

19世紀末になると、ユダヤ人によるパレスチナでの国家建設を目指す運動が起こってくる。これをイェルサレムの雅名にちなんでシオニズムという。紀元1世紀にローマ帝国がパレスチナ地域からユダヤ人を退去させて以来、ここにはおおむねアラ

ブ人が居住し、7世紀からはイスラーム教徒となり、この地の中心勢力となっていた。ユダヤ人はまた、とりわけ十字軍運動以降、ヨーロッパにおいて差別や迫害を受け、ゲットーへの隔離を余儀なくされるなど、反ユダヤ主義にも苦しめられてきた。こうした状況に対して、ユダヤ民族は自分たち自身の国家を建設しようとしたのである。

特に1894年にパリで起きた<sup>⑩</sup>ドレフュス事件は、シオニズムの進展に大きな影響を与えた。当初ドイツのスパイとして有罪判決を受けたドレフュスは、ユダヤ人のフランス軍将校であった。しかし、その後に真犯人が判明したにもかかわらず、フランス軍はその頑迷さや反ユダヤ主義のためにあくまでもドレフュスを有罪とすることにこだわった。そのためこの問題は大きな事件となったが、最終的に1906年に無罪となったドレフュス自身は、事件後もシオニズムに特段の関心を示さなかったという。しかし、この事件はドレフュス個人の考えとは別に、ユダヤ人の民族主義を高揚させる役割を果たすことになった。

第一次世界大戦中のイギリスの動きによって、パレスチナとユダヤ人をめぐる問題<sup>⑪</sup>は複雑化していく。イギリスは一方で、( C )により、戦争への協力を条件に、オスマン帝国からのアラブ人の独立を認めると約束した。しかしイギリスは他方で、( D )によってユダヤ人のパレスチナにおける民族的郷土の設立を約束した。厳密には、( C )の中でパレスチナは「アラブでない土地」として例外扱いとされていたので、イギリスのこの2つの動きは完全に矛盾するものではなかった。しかしイギリスのこうした動きは、結果的にパレスチナの支配をめぐる問題を混乱させることになった。

こうして、アラブもユダヤも第一次世界大戦ではイギリスを含む連合国側について戦ったが、大戦後に国際連盟からパレスチナ統治を委任されたのはイギリスであった。委任統治府はイェルサレムに置かれた。イギリスによる委任統治時代のパレスチナでは、上記の第一次世界大戦中の経緯もあり、アラブ人とユダヤ人の激しい民族抗争を経験することになる。そのような状況の中でもイェルサレムはイギリスの委任統治期間中に近代化がおし進められ、安定的な水道の確保によって、大学、ホテル、博物館なども建設された。1924年にはイェルサレムにヘブライ大学が設立され、20世紀の科学技術<sup>⑫</sup>に大きな影響を与えた相対性理論で知られるアインシュタインが最初の記念講義を行った。

第二次世界大戦中にパレスチナ地域が戦場となることはなかった。しかしアラブ側は、第一次世界大戦以来のイギリスへの不信感から、総じて親枢軸国（ドイツ）的なスタンスをとった。他方、ユダヤ側は、連合国（イギリス）側の立場を明確にした。また、ナチスによるユダヤ人の大量虐殺、すなわちホロコーストは、連合国側にとってもユダヤ人に対する大きな負い目になったという。結局、国際連合は1947年に（E）を通過させ、パレスチナにアラブ国家とユダヤ国家の双方を設立することを決定した。ただし、その内容は、アメリカの強い主張により、人口および所有地の点で小さな割合を占めるにすぎなかったユダヤ人に、パレスチナ全体の半分以上の土地を与えるという不合理なものであった。結局、ユダヤ人がこれを受け入れた結果、翌年の1948年にユダヤ人の独立国家としてイスラエルの建国が宣言された。

しかし、これに不満をもつエジプト、シリア、イラクなどのアラブ諸国は、イスラエルの建国宣言直後から攻撃をはじめた。これが、パレスチナ戦争（第1次中東戦争）である。アラブ側はこの戦争に大敗し、（E）で定められた以上の土地をイスラエルに奪われてしまう。これに伴い、パレスチナから大量のアラブ人が追放されて難民化した。パレスチナ難民たちは、1964年にアラブ諸国の支援のもとにパレスチナ解放機構（PLO）を設立し、イスラエルからのパレスチナ奪回を目指す運動において指導的役割を果たした。

アラブ諸国とイスラエルとの争いは、第1次中東戦争の後も、スエズ戦争（第2次中東戦争）、第3次中東戦争、第4次中東戦争を引き起こすことになった。エルサレムを含むパレスチナ地域におけるアラブ人とユダヤ人の問題は、21世紀の現在になってもなお解決されていない。

問1 下線部①に関連して、彼についての記述として正しいものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

- ア. ヒッタイトとカデシュの戦いを行った。
- イ. ギザに最大のピラミッドを建設した。
- ウ. アレクサンドリアにムセイオンを開設した。
- エ. 上下エジプトの統一を行った。
- オ. 唯一神アトンの信仰を強制した。

問2 下線部②に関連して、現在はフィレンツェのアカデミア美術館に収蔵されている有名な大理石像「ダヴィデ」という作品を残した人物は誰か。

問3 下線部③に関連して、後にローマ教皇をアヴィニョンに移転させ、いわゆる「教皇のバビロン捕囚」を強行したフランス王は誰か。

問4 下線部④に関連して、ユダヤ教の特徴として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア. 善悪二元論

イ. 選民思想

ウ. 兼愛

エ. 六信と五行の義務

オ. 三位一体説

問5 下線部⑤に関連して、前1世紀のローマに関する次の出来事を歴史の古い順に並べ替えなさい。

ア. レピドゥスが失脚した。

イ. アクティウムの海戦が起こった。

ウ. カエサルが暗殺された。

エ. スパルタクスに率いられた剣奴が大反乱を起こした。

オ. クラッススがパルティア遠征で戦死した。

問6 下線部⑥に関連して、当時の世界の他の地域に存在していない国・王朝を、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア. 西ゴート王国

イ. 唐

ウ. ヴァルダナ朝

エ. グプタ朝

オ. フランク王国

問7 下線部⑦に関連して、十字軍に関する記述として誤っているものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

- ア. 第3回十字軍では、イギリス王リチャード3世が単独でアイユーブ朝のサラディン（サラーフ=アッディーン）と戦ったが、最終的には失敗に終わった。
- イ. 第4回十字軍では、ヴェネツィア商人の意向のために、エルサレムではなくコンスタンティノープルを占領した。
- ウ. 第5回十字軍では、ドイツ皇帝フリードリヒ2世がアイユーブ朝との話し合いにより聖地を一時的に回復したが、永続しなかった。
- エ. 第6回と第7回の十字軍は、フランスのルイ9世によって主導されたが、聖地回復という目的は果たせなかった。
- オ. ドイツ・フランスなどで神のお告げを聞いたという少年たちが率いる少年十字軍が聖地に向かったが、失敗に終わった。

問8 下線部⑧に関連して、スレイマン1世に関する記述のうち正しいものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

- ア. プレヴェザの海戦で勝利したオスマン海軍は、クレタ島・マルタ島を除く地中海全域での制海権を握った。
- イ. スレイマン1世の治世にウィーン包圍（第1次）が行われた時に皇帝として神聖ローマ帝国を支配していたのは、マクシミリアン1世である。
- ウ. スレイマン1世から南イラクを奪われたサファヴィー朝は、その後も17世紀まで存続した。
- エ. スレイマン1世の命により建造されたスレイマン=モスクは、内・外ともサン=ピエトロ大聖堂と非常に類似した構造をもっている。
- オ. スレイマン1世と同盟を結んだフランスのアンリ4世は、晩年のラファエロの保護者であった。

問9 下線部⑨に関連して、第2回エジプト=トルコ戦争の処理のために1840年に開かれた列強の会議の名前は何か。



問10 下線部⑩に関連して、「わたしは弾劾する」という公開状を著し、ドレフュス事件でその無罪を勝ち取る運動に活躍した作家は誰か。

問11 下線部⑪に関連して、以下の出来事を歴史の古い順に並べ替えなさい。

- ア. アメリカがドイツに宣戦する。
- イ. キール軍港の水兵反乱が起こる。
- ウ. ソヴィエト政権がドイツと単独講和を結ぶ。
- エ. タンネンベルクの戦いが起こる。
- オ. マルヌの戦いが起こる。

問12 下線部⑫に関連して、20世紀の科学技術ではないものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

- ア. 原子力発電が実用化された。
- イ. ラジオ放送が開始された。
- ウ. 四輪ガソリン自動車完成した。
- エ. 航空機による初飛行に成功した。
- オ. 原子爆弾の開発に成功した。

問13 下線部⑬に関連して、1969年以來パレスチナ解放機構の議長を務め、1993年にはイスラエルとの相互承認のもとにパレスチナ暫定自治政府を立てた人物は誰か。

問14 下線部⑭に関連して、以下の語群の中から最も適切な語句を5つ選び出し、それらをすべて用いてスエズ戦争（第2次中東戦争）の主要原因について150字以内で述べなさい。なお、選び出した語句は下線を引いて示すこと。

語群

スエズ運河の建設、スエズ運河の国有化、スエズ運河会社の株式買収、ナギブ、サダト、ナセル、ムバラク、アスワン=ハイダム、ナイル川、ヴィクトリア瀑布、第三勢力、西側諸国、イスラエル、インド、中国、ユーゴスラヴィア

II 以下の文章中の空欄AからHに最も適切な語句を記入し、続く設問に答えなさい。  
ただし、同じ記号には同じ語句が入る。(50点)

共通の祖語から派生したと考えられる言語グループを語族という。比較言語学で推定されているこの語族<sup>①</sup>の祖語を話していた人々は、前5千年紀末頃、黒海・カスピ海北方のステップを生活圏とする半農半牧民であったと考えられている。彼らは、この起源となった地域から、次々に四方に拡散していった。

まず、最初にステップから出て行った人々は、南に向かい、( A )で先住民を征服して、やがて、今のボアズキョイを都として、建国した。彼らは、ウマと戦車を活用して、強力な戦闘力を誇示した。とりわけ、彼らの鉄製武器は威力があり、バビロン第一王朝を滅ぼした。北西には、割合に早い時期から( B )人が向かい、スカンジナビア半島南部からドイツ北部にかけて定着した。西方に向かった人々はバルカン半島に入ってから南下して、ペロポネソス半島のミケーネに定住し、いくつもの小王国を建てて、繁栄した。やがて、同じ語族に属する( C )人が北から侵入して、先住民を征服して、古代ギリシャ文明を打ち立てた。一方、故郷のステップから西に進んだ人々のうち、ヨーロッパ中央部から西部にかけての広範な地域に( D )人が定着した。さらに、南東方面に向かった人々は、一部は、今のイラン高原に定住したが、それとは別に、一部の人々はさらにカイバル峠からインドに侵入し、先住民を駆逐して北西インドに定着した。イタリア半島に行った人々は、先住民を駆逐して、やがてローマを建国した。ヨーロッパへの進出と定着は、この語族の世界的規模での拡散において、最初の重要な足がかりとなった。かくて、原故郷のステップからこの語族の人々が各地へと旅立って、それぞれの地域で定着した時点で、ユーラシア大陸の西方部分は、西はイベリア半島から東はトカラまで、北はスカンジナビア半島から南はインド北西部まで、この語族の言語を話す人々で覆われるに至った。

ローマ帝国内で文明生活を送っていた人々から見ると、帝国外に住む人々は、蛮族であった。蛮族の大侵入は、その後長く、ヨーロッパを大混乱に巻き込み、政治的・経済的に大きな打撃を与えた。ヴァイキングの末裔である( E )が、1066年にイングランドを征服して、全国的な検地を行い、封建制を敷いた頃に、この混乱がようやく収束した。<sup>③</sup>征服されたイングランドは、その後、数百年間にわたり、( F )

の言語・文化・制度の影響を色濃く受けることになる。

民族移動期の混乱後、外敵からの地政学的な脅威が西ヨーロッパで消滅すると、ヨーロッパの独自性が育まれるようになった。政治面では、地方分権的な体制が形成された。中でも、西ヨーロッパ各地に封土と家臣を軸とした封建制が定着することとなった。経済面では、農業における革新的な生産技術によって効率的な土地利用方法<sup>④</sup>が実施された。宗教面では、都市と一部の<sup>が</sup>上層階層に限定されていたキリスト教が、農村・庶民階層にまで普及が進んだので、イスラーム教徒に占領されているイェルサレムの「失地回復」という宗教的な動機が広まった。かくて、西ヨーロッパで安定的な政治体制が整えられて、経済が発展して国力が増大すると、豊かな富を享受していた文明地域へと侵略を開始した。この軍事活動は、キリスト教の普及によりイスラーム教への敵愾心の高揚が最初の動機であったが、同時に、南の物的富の豊かさに引き寄せられた略奪活動でもあった。

この語族の世界への拡散において、決定的に重要だったのが、いわゆる地理上の「発見」とその後の征服である。イベリア半島でのキリスト教徒による「失地回復」が実現したちょうどその頃、三つの「発見」が相継いで実現した。コロンブスによる《新大陸》の発見、ヴァスコ・ダ・ガマによる喜望峰経由のアジア航路の発見、そして、マゼラン（マガリャンイス）一行による世界一周航路の発見である。ヨーロッパ人の到来以前、《新大陸》は無住の地ではなく、古代から多くの人々が住んでいた。中米では、古代からマヤ文明が栄え、メキシコ高原にアステカ王国、南米ではクスコを中心に南北 2000 km にも及ぶインカ帝国が形成されていた。北米では、国家形成には至らなかったが、のちにインディアンと呼称された先住民が多めの推計ではおよそ 1000 万人も居住していた。16 世紀にコルテスによってアステカ王国が征服され、ピサロによってインカ帝国が滅ぼされた。そして、17 世紀に白人が北米に入植し始めると、彼らは、その後、継続的に西部への開拓を進め、先住民たちを圧迫して駆逐<sup>⑥</sup>し、西方への領土拡大を実現した。19 世紀末に、フロンティアが消滅した時、北米の先住民人口は急激に減少していた。かくて 15 世紀末に開始したヨーロッパ人の征服活動と統治の定着によって、僅か数世紀の間に、この語族に属する言語が、《新大陸》に拡散し、公用語として確立した。<sup>⑦</sup>それは同時に、先住民に固有の伝統文化の破壊であり、彼らの言語の駆逐であった。その背景には、先住民人口の急激な減少が

あった。

《新大陸》での開発はヨーロッパ諸国の経済に多大の恩恵を与えた。17世紀からヨーロッパ諸国によるアジア・アフリカ進出が活発化すると、その対外拡張行動は、19世紀に各国の植民地拡大として結実した。中でも、イギリスは大英帝国として経済力とそれが支えた軍事力と国際金本位制を背景に（ G ）と呼ばれた英国中心の国際秩序の構築に成功して、英語の国際的な普及の礎となった。第二次世界大戦後には、イギリスに代わってアメリカ合衆国が国際的な秩序の中心的な位置を占めることで、英語は、世界の共通言語（コミュニケーションツール）としての地歩を固めることになった。

今から6000年ほど前にユーラシア・ステップの片隅で棲息していた遊牧民の集団が話していた言語が母体となって、今日では、全世界の広大な範囲で多数の人々がこの言語グループに属する言語を母語としている。6000年前から今日に至るこの語族の諸言語の拡散は、おおむね言語の置換であり、必ずしも民族の置換ではなかった。言語の置換（先住民をしてこの語族の言語を話すようにさせる）は常に暴力的に成し遂げられたわけではない。この語族の人々はステップに住んでいた時から商業活動にも長けていたので、すでに進出先にいた先住民に対して、平時には交易を通じて平和的に浸透した。とはいえ、《新大陸》での征服活動に顕著に表れているように、彼らは時には暴力的に征服することも、また先住民を物理的に駆逐することも厭いとわなかった。ステップにいた彼らはもともと牧畜民であるので、乳製品と肉を常食しており、身体頑健であるうえに、遊牧民としての生業が日々の軍事訓練となり、非常に精強であった。彼らはきわめて好戦的な人々として恐れられていたが、中でもこの語族の祖先がステップの地にいた時に描いたとされる階級に関する観念が彼らの神話に色濃く反映されている。特に、古代、インド侵略において、先住民征服の後に確立された階層制度<sup>⑧</sup>こそ、この語族が有する神話の真髄を如実に示している。彼らが擁する専門的な軍事組織である戦士たちは、（ B ）人におけるベルセルク（狂戦士）、ヨーロッパ中世の騎士、大航海時代の《新大陸》における（ H ）、ヨーロッパ近代軍事組織など、この語族の拡大を実現するうえで、比類なき強力な軍事力を体現していた。かくて、彼らは、今日に至る拡散過程で、平和的にであろうと、暴力的にであろうと征服して支配すると、最終的に先住民の言語を駆逐して、この語族の言語を押しつけ

ることで置き換えていったのである。

問 1 下線部①に関連して、「この語族」は何か。

問 2 下線部②に関連して、この王朝第 6 代の王で、282 条からなる法典を制定した人物は誰か。

問 3 下線部③に関連して、検地によって作成された資料の名称を解答欄に記入しなさい。

問 4 下線部④に関連して、「革新的な生産技術によって効率的な土地利用方法」について 60 字以内で説明しなさい。

問 5 下線部⑤に関連して、以下の文章の中で正しくないものをひとつ選びなさい。

ア. コロンブスは、トスカネリの地球球体説を信じて、西に進んだ。

イ. この航海の目的のひとつは、キリスト教の布教であった。

ウ. この航海の目的のひとつは、金銀財宝の獲得であった。

エ. この航海の目的のひとつは、奴隷の捕獲であった。

オ. 発見した領土は、ポルトガル国王に献上された。

カ. コロンブスは、発見した領土はインドの一部だと信じていた。

問 6 下線部⑥に関連して、北米における征服者たちは 19 世紀になると先住民の駆逐と西方への領土拡張を正当化する信念を抱くようになっていたが、それを何と  
いうか。

問 7 下線部⑦に関連して、《新大陸》において、ポルトガル語が公用語とされた国があるが、それはどこか。また、その地域がポルトガル領となる根拠を与えた条約は何か。

問 8 下線部⑧に関連して、以下の空欄に適切な語句を入れなさい。

( a ) 文明を打ち立てて栄えていたのは、先住民である ( b ) 人だと考えられるが、( c ) 人は彼ら先住民を征服すると、( d ) 制という階層制度を打ち立てた。その階層制度における戦士たちは ( e ) と呼ばれたが、この制度は、最終的に今日まで残る ( f ) 制の起源となった。